

Hippophile

Sep. 2015 No. 62

ヒポファイル



目 次

馬事資料

中西関松の時代からと金山明彦の時代へ

—ばんえい競馬の近代化— 古林 英一 1

京都競馬場スタンド建築の変遷 林 正樹 13

馬事往来

「引退馬ホースサミット in 日高」の開催 藤沢 澄雄 17

隠岐諸島、島前での馬事あれこれ 岩田 光太 20

特別記事

ノーザンホースパーク

—多様な側面を持つ「馬のテーマパーク」— 広瀬 春行 25

Journal of Equine Science Vol. 26 No. 3, September 2015 和文要約 29

お知らせ 31

協賛団体名・賛助会員名簿 32

Hippophile 投稿に関する基準 33

編集後記

Hippophile No. 62

-編集委員-

編集担当常任理事 田谷 一善 (東京農工大学)

編集委員長 楠瀬 良 (日本装蹄協会)

編集委員 相川 貴志 (地方競馬全国協会)

石田 信繁 (JRA 競走馬総合研究所)

近藤 誠司 (北海道大学)

末崎 真澄 (馬の博物館)

杉本 篤信 (競馬保安協会)

関 正喜 (北海道新聞社)

永井富美子 (エディター)

沼田 恭子 (NPO 法人引退馬協会)

三浦 暁子 (エッセイスト)

守谷 久 (北海道新聞社)

山口 洋史 (JRA 馬事公苑)

山野 浩一 (作家)

表紙絵：騎手 (The Jockey)：アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック (1864-1901) 1899 年 49.8×34.1 センチ多色刷り

リトグラフ 馬の博物館蔵

「騎手」は、晩年に近い療養中に一連のサーカスシリーズとともに表した作品である。ロートレックは、少年の頃に父親とともに乗馬をし、競馬場にもしばしば通った経験があり、晩年に再びその情景を思い巡らしている。後ろ姿の騎手は、あるいは馬と競馬を愛した父と自分の姿を映し出しているのかもしれない。

日本ウマ科学会

Japanese Society of Equine Science

馬事資料

中西関松の時代からと 金山明彦の時代へ —ばんえい競馬の近代化— 古林英一



From the Sekimatsu NAKANISHI Era to the
Akihiko KANAYAMA Era: The Modernization
of Ban-ei Horse Racing
Eiichi FURUBAYASHI

古林英一（ふるばやし えいいち）

1958年兵庫県生まれ。北海学園大学経済学部教授。
1987年京都大学大学院農学研究科農林経済学専攻博士
課程中退。南九州大学園芸学部、北海道大学水産学部
を経て2000年4月から現職。1999年～2011年中央畜
産会軽種馬生産費調査委員。2001年10月～2003年9
月北海道地方競馬運営委員。2007年8月～現在NPO
法人とかち馬文化を支える会理事。

1. はじめに

産業現場で働く馬と人が副業的に行う競馬であったばんえい競馬は1960年代終わり頃から1970年代にかけて大きな変貌を遂げる。それは一言で言えば副業的競馬から専門的な競馬への転換であった。今日われわれが見ているばんえい競馬がほぼ完成したのがその時代であったといえる。

本稿は産業現場と密接不可分の関係にあった時代から、ばんえい競馬が専門的な競馬として確立する過程で、どのような変化が起こったのかを明らかにすることを課題としている。古林英一（2006, 2007）^{12, 13)}では産業現場と密接不可分の関係にあった時代のばんえい競馬の実態を報告した。本稿はいわばその続編というべきものでもある。

副業的競馬の時代のばんえい競馬を代表する騎手に中西関松がいる。その後、ばんえい競馬が専門的な競馬として確立し大きく発展する時代にスーパースターとして君臨したのが金山明彦（現調教師）である。この二人の歩みはそれぞれの時代のばんえい競馬を象徴している。そこで本稿ではこの二人をそれぞれの時代の象徴として取り上げ、その歩みに即してばんえい競馬の変化をみていく。

2. ばんえい競馬の発足

ばんえい競馬は産業現場における馬・人と密接不可分の関係にあった。このことは偶然ではなく、ばんえいのみならず、地方競馬がそもそもそのようなものとして構想されていたことを改めて確認しておきたい。

1945年8月わが国がポツダム宣言を受諾し第二次大

戦が終結する。周知のように、その後わが国は連合国軍の統治下におかれ、数多くの戦時法令が撤廃され、戦時統制が解除される。1927年農林・内務両省の省令である地方競馬規則に基づき制度化された地方競馬は、戦時統制のもとで軍用馬資源保護法がその根拠法となっていたが、この法律も廃止される（1945年11月20日勅令）。その結果、地方競馬は根拠法を失う。

この法的空白期に根拠法を持たないまま競馬が各地で開催される。「ヤミ競馬」や「国民競馬」とよばれるものである。地方競馬全国協会（1972）は「ヤミ競馬」の嚆矢は浜松あたりではないかとしているが、当事者の記憶違いがないとすれば、終戦間もない1945年9月に競馬競走が開催され馬券が販売されたという¹⁴⁾。もっとも、競馬競走の主催者が馬券を売ったわけではなく、私設馬券屋が勝手に馬券を売ったものであるし、そもそも地方競馬法に競馬競走は規定されていないので、これを他の「ヤミ競馬」と同列に論じるわけにはいかないかもしれない。また、終戦後の混乱期ならでの事例として、日本に駐留していた米軍が関与したケースも有名である¹⁵⁾。

こうした事態に対応するべく、新たに地方競馬の法整備が求められ、1946年に召集された第90帝国議会において、自由党、進歩党、社会党および協同民主党4党の超党派で地方競馬法案が提出され可決された¹⁶⁾。ここで強調したいことは、地方競馬法案で規定される「地方競馬」は、後の中央競馬につながる「公認競馬」とはまったく別の競馬として構想されていたことである。

すなわち、「（公認競馬が軽種馬を主体とするのに対

して) 地方競馬ハ御話ノ通り産業馬デアリマシテ、或ハ農耕用デアリ、或ハ軌馬ニ適スルモノヲ生産シ、此ノ競争(原文ママ)ニ走ラセルコト存ジマス」⁽⁴⁾というものであり、「百姓ノ少シ氣ノ利イタ人ガ騎手ニナツテ競走スルノダト云フコトガ、地方競馬ノ主タル目的デアリマス」⁽⁵⁾というものであった。

実際、こうして誕生した地方競馬は、小笠原のいう「百姓ノ少シ氣ノ利イタ人ガ騎手ニナツテ競走スル」ものであった。関耕平・平田直樹(2008)⁷⁾では、益田競馬の古くからの馬主の回想をもとに、草競馬が近代的競馬に変化していく過程が明らかにされている。

地方競馬がかようなものとして構想されたからこそ、競走の種類に軌馬競走は不可欠のものとして規定されたのであろう。軌馬競走を法的根拠をもつ競馬として位置づけるにあたっては、その背景に小運搬事業者(=馬車運送業者)の活動があったことも想像される⁽⁶⁾。

馬産振興は産業復興の基礎として位置づけられており、それに資する地方競馬という位置づけは、当時の産業の実態に適合したものだだった。

1940年代後半の日本社会に生きた人々の大部分にとって、当面、馬が産業の基盤であり続けることに疑いはなかったであろう。高度経済成長とモータリゼーションの急速な普及がわが国の社会を大きく変貌させたことを後代のわれわれは知っているが、当時の多くの人々には想像もつかなかったと思われる。たとえば、当時を代表する農業経済学者の一人であった大槻正男(当時京都帝国大学農学部教授)は有畜農業への転換にわが国農業の展望を見いだしていた⁽⁷⁾。

地方競馬法に規定された地方競馬の主催者は、大戦前と同様、畜産団体である。それゆえ地方財政への寄与は競馬の目的ではない⁽⁸⁾。ところが、その後、地方競馬の性格を大きく変える事態がおこる。馬事団体の解散である。馬事団体の解散(形式的には自主的な解散だが、事実上はGHQの指示によるところが大きい)は、馬事・馬産団体が軍事色が強かったからだと説明されること多い(馬が重要な軍事物資であったことは確かだが)が、漁業や農業の団体も解散を余儀なくされていることをみると、馬産が軍事産業だったからというよりは、中央集権的統制団体の解散という戦後民主改革政策の一環であるとみるべきであろう。

競馬そのものについては、アメリカ軍を主体とする連合国軍はむしろ比較的好意的であり、競馬を廃止さ

せようという意図はなかった。そこで、おそらくは緊急の策として、公認競馬は国を、地方競馬は地方自治体(具体的には都道府県)を主催者とする新たな競馬法が成立(1948年7月13日)する。

地方自治体にとって戦後の混乱期における財政逼迫状況をしのぐための財源として公営競技は魅力あるものであった。競馬法制定とほぼ時期を同じくして自転車競技法が成立し、競馬の強力なライバルとなる競輪が誕生している。

地方競馬法の廃止・新競馬法の成立により、ばんえい競馬も北海道が主催することとなった(後の法改正で一定要件を満たす市町村も主催権を得たので、旭川・帯広・岩見沢・北見の4市も主催者となる)。ただし、ばんえい競馬の開催について、北海道は必ずしも前向きではなかったようで、旭川の軌馬組合長の五十嵐栄三郎や帯広の軌馬組合長の山数栄らが道に開催を働きかけたという⁽⁹⁾。

地方競馬は米軍の施政下にあった沖縄県を除くすべての都道府県で開催されたものの、競走馬資源の不足と馬券発売額の不振により、数年の間に多くの主催者が競馬事業から撤退した。

馬券発売額の不振については、次々に生まれた各種公営競技(1948年に発足した競輪に加え、1950年にはオートレースが、そして1951年には競艇が加わった)との競合もあった。

高度経済成長期前半までに多くの府県が競馬事業から撤退したが、産業用馬による競馬から競走専用馬による競馬への転換に成功したところは競馬事業を継続し、高度経済成長期に馬券の発売額を大きく伸ばし、地方財政に大きく寄与した。

ばんえい競馬は平地競走に比べると産業とのつながりを遅くまで保っており、地方競馬法制定時に想定された競馬が最後まで残っていた。

3. 中西関松とその時代

ばんえい競馬の草創期から確立期にかけてのトップスターは中西関松である。中西は1919年新十津川村の農家の第5子として生まれた。第5子ではあったが、一番上の兄が早世し、続く3人はいずれも女子だったため、中西は事実上の長男であった。当時の農家であるから、関松も子供のときから農作業の手伝いをしていただろうし、幼いときから馬にも親しんだと思わ

れる。トシエ夫人によると⁽¹⁰⁾、中西は第二次大戦中に中国大陸に出征し、腹部を銃弾が貫通したものの、奇跡的に命を取り留めたという。復員後、滝川に移り、山仕事や小運搬で生計を立てていた。根っからの競馬競走好きで、近隣で開催される競馬大会には愛馬とともに必ずといっていいほど出場していた。

1947年10月、旭川と岩見沢でそれぞれ2日間ずつ、北海道馬匹組合連合会（馬連）の主催で地方競馬法に基づいたばんえい競馬が開催される。中西は「待ってましたとばかり参加」⁽¹¹⁾したと回想しているが、このときの詳細な記録が未発見なので、中西が旭川と岩見沢の両方に参加したのかどうかは定かではない。

馬連主催のばんえい競馬は所期の成果をあげることができず翌年は休止となる。そのまま消えてしまう可能性も多分にあったと思われるが、1948年に地方競馬法が廃止され競馬法が制定されると、馬車業者たちの努力によって道営でばんえい競馬が行われることになり、紆余曲折がありながらも1949年から今日まで公営競技として継続している（このあたりの経緯は古林英一（2014）⁽¹²⁾などを参照されたい）。

1953年からは旭川・帯広・岩見沢・北見の4市も開催権を得て、ばんえい競馬は北海道と4市の主催となる。当初は4市それぞれの主催による平地競馬も行われていたが、4市はいずれも1960年代初めまでには平地競馬から撤退し、ばんえい競馬だけを主催するようになり、北海道は1965年の開催を最後にばんえい競馬の開催をやめ平地競走だけを主催するようになる。

1949年に4日間の開催で始まったばんえい競馬は徐々に開催日数を増やしていき、4市の主催がはじまった1953年には20日間の開催となっていた。その後、馬券の発売額も開催日数も順調に推移し、1953年の馬券発売額は49,375,600円（20日間）だったのが、5年後の1958年には142,607,500円（48日間）となった。1日あたりの発売額を比較すると、1953年は313万円、58年は297万円で、1日あたりの発売額は減少している。発売額の伸びは専ら開催日数の増加によるものであった。

4市には他の公営競技がなかったことも、競馬が経営困難に陥らずにすんだひとつの要因であったように思われる。ドッジ不況による馬券購買力の低下に加え、1950年に始まった札幌競輪の影響で、道営競馬のドル箱であった札幌・小樽（銭函）での開催は苦戦したと

いわれる⁽¹³⁾。開催初年度（1950年度）の札幌競輪が244,023,700円、函館競輪が140,850,700円を売上げたのに対して、道営競馬の発売額は83,237,550円にとどまっており、影響はかなり大きかったものと推察される。

1960年頃でも、古林英一（2006, 2007）^(12, 13)で述べたとおり、ばんえい競馬が開催された4場を転戦する騎手や馬は少ない。大部分の人や馬はそれぞれの地元のみに出走していた。各競馬場では、競走数を確保するため、農家が飼養している馬をかき集めて番組編成が行われていた⁽¹³⁾。

中西は各場を転戦する数少ない騎手（馬主兼調教師でもあった）の一人であった。トシエ夫人によると、「（あちこちに出走していたのは）うちのお父さん（＝関松）以外に何人かしかいなかった」という。中西の場合は、腕を買われて、他の人の所有馬も預かり、自分の所有馬以外の馬にも多く乗っていたようである。

ばんえい競馬発足時のルールでは騎手は櫓の上で立ち上がってはいけなとされていた。この立ち乗り禁止ルールはまもなく廃止されたのだが、このことからもうかがわれるように、産業現場で愛馬と共に働いていた当時の騎手たちの騎乗スタイルは、今日みられるスタイルとは異なり、騎手の動きは小さかった。長手綱だけで馬を御するのが当時のスタイルである。

現在のばんえい競馬は直線セパレートコースであるが、当時はU字型走路である。それゆえ、コース取りやコーナリングの巧拙が競走成績を大きく左右する。中西はコース取りに卓越した技能を発揮し勝ち星を重ねていった（図1）。

残念なことに1962年以前の記録が残されておらず、中西の全騎乗成績を知ることはできないのだが、記録の残る1963年から騎乗騎手を引退した1977年までの14年間だけでも、4,616戦で883勝をあげている（表1）。記録の残る1963年以降だけで8回のリーディング表彰を受けている。1963年といえば中西はすでに44歳である。平地競走に比べると高齢での活躍が目立つばんえい競馬とはいえ、全盛期はすでに過ぎていたと思われる。40代後半以降だけでリーディング表彰8回というのは驚異的なものといえよう。

しかしながら、1970年代になると、さしもの名人・中西も徐々に衰えをみせはじめ、山田勇作⁽¹⁴⁾、木村卓司⁽¹⁵⁾といった若手騎手の台頭でトップの座を奪われる

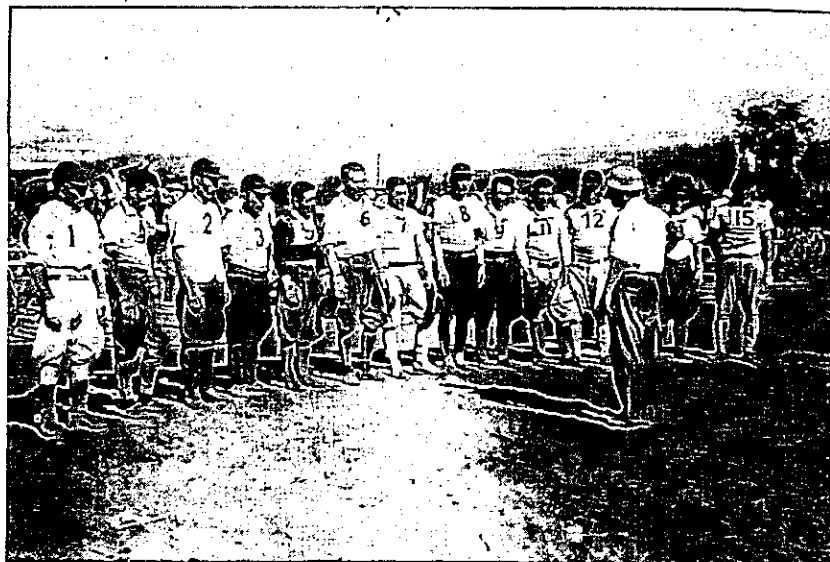


図1. 1950年頃の騎手（旭川競馬場，右から2人目が中西関松。中西トシエ氏提供。）

表1. 中西関松の騎乗成績

年度	騎乗回数	1着数	勝率	備考
1947～1962	不明			1959・60年ヤスヒラで農林大臣賞典連覇， 62年キヨユキで農林大臣賞典制覇
1963	340	76	22.4	リーディング1位
1964	294	174	59.2	リーディング1位
1965	417	102	24.5	リーディング1位
1966	425	114	26.8	リーディング1位
1967	447	93	20.8	リーディング1位
1968	340	86	25.3	リーディング1位
1969	309	67	21.7	リーディング1位，ハルトカチで農林大臣賞典制覇
1970	254	11	4.3	ハルトカチで農林大臣賞典連覇
1971	228	12	5.3	リーディング1位
1972	245	14	5.7	コマバで第1回ばんえいダービー制覇
1973	276	16	5.8	
1974	333	17	5.1	
1975	252	17	6.7	
1976	222	17	7.7	
1977	234	17	7.3	
1963～1977	4,616	833	18.0	

資料：北海道市営競馬協議会【競走成績書】各年等

ようになる。そして愛弟子である金山明彦が1973年からトップに君臨し続ける時代となる。

1970年代後半になると，職能分離が進められる。前述のように，産業現場で使役される愛馬で出走するというのが元々の地方競馬である。したがって，騎手は，馬主でもあり，調教師でもあった。しかしながら，地方競馬も競走専用馬の競馬となり，公正競馬確保の観点から職能分離が推し進められる。ばんえい競馬は

もっとも遅くまで元々のスタイルを維持していたものの，1970年代半ばには他の地方競馬と同様，職能分離が行われるようになった。草創期から中西としのぎを削ったベテラン騎手たちは次々に専門の調教師（＝調教騎手という名称が使われた）になっていった。

北海道市営競馬協議会の資料によると，1970年度，報償金を受け取った人は，全部で322人である。その内訳は，馬主（調教師に馬を預託し騎乗もしない人）

は87人、馬主でありなおかつ調教も行い騎乗もしていた人が74人、調教はしないが馬主であり、なおかつ騎乗していた人が5人、厩務員でありなおかつ馬主でもあった人が45人となっている。馬主でない調教専門者はゼロ、馬主ではない騎乗専門者は5人、馬主ではなくて調教・騎乗を兼業している人が16人となっている。他に馬主ではない厩務員が90人となっているが、その多くは、調教師（当時の呼称でいうと調教騎手）・騎手・厩務員の家族であった。それが1977年度には馬主で騎手や調教師という人はいなくなり、騎手と調教師を兼業している人も1人（＝中西）だけとなっている。

1970年代の半ばになると、さすがの中西も体力の衰えは隠せなくなっていた。この頃になると、レースが終わると息が上がり顔面が蒼白になっていたという。それでも勝負に賭ける執念は衰えてはおらず、60歳までは乗ると言っ張っていたが、トシエ夫人をはじめ周囲の人々のすすめもあり、1977年、ついに現役引退を決意する。58歳であった。中西の現役引退により、ばんえい競馬の職能分離が完成した。

現役引退後は専業の調教師として活躍し、1982年には帯広市の産業功労賞を受賞する。そして1985年11月調教師を引退する。調教師引退後も馬の仕事から離れることはなく、ばん馬の育成事業を営んでいた。中西本人は80歳までは育成の仕事の続けると公言していたというが、1990年1月9日、朝、馬を積んで陸別まで行き、牧草を積んで戻ってきたところ心筋梗塞を発症し急逝した。享年70歳。

中西が亡くなった1990年度、ばんえい競馬は史上最高の321億円の発売額を記録した。第二次大戦後もない1947年わずか4日間・298万円の発売額で出発したばんえい競馬がここまで大きくなり、大好きなばん馬競走で生活ができるようになるとは、中西本人も思っていなかったろう。バブル崩壊にともなう長期不況の始まりで、翌91年の323億円をピークに坂道を転がり落ちるように馬券発売額は急落し続けることとなるのだが、名人・中西関松は、愛してやまなかったばんえい競馬の衰退を見ることなく彼岸に旅立った。

4. ばんえい競馬の完成

産業現場で活動する馬と人による非専門的な競馬という地方競馬法制定当時のプランは、急速なモータリ

ゼーションの普及によって霧消してしまう。

産業動力としての馬産振興という競馬の役割は社会的にみればあまり意味をなさなくなっていたが、その一方で、高度経済成長による国民所得の増大にともなうレジャー需要の拡大で、各種公営競技の発売額は右肩上がりの成長を続けていた。地方競馬の主催者である地方自治体にとって、競馬をはじめとする各種の公営競技は貴重な収入源となっていた。いわゆる「財政競馬」である。沖縄県を除く46都道府県のうち、1964年までに24の府県が地方競馬から撤退したが、残りの都道府県は産業用馬ではないアングロアラブやサラブレッドの導入で競馬事業を継続した。逆にいえば、こうした転換によって競走馬資源を確保し得たところだけが競馬事業を継続できたともいえる。また、北海道、とりわけ日高地方がアングロアラブやサラブレッドの産地として成長することで、中央競馬や残存した地方競馬の競走馬資源は安定的に確保できた。

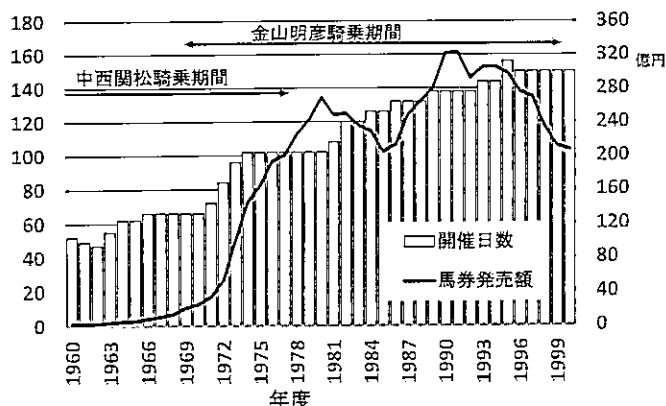
ばんえい競馬の競走馬資源はもっぱら産業用馬であり、北海道の4市のみで開催される競馬に過ぎない。競走馬としての重種馬の需要はせいぜい年間200頭前後に過ぎず、馬が産業現場から姿を消せば競走馬資源がなくなり、多くの地方競馬と同様消え去ってしまう可能性は多分にあったと思われる。

しかしながら現実にはそうはならなかった。むしろ、産業現場から離脱することで、ばんえい競走馬は競走専用馬として馬格が向上し、馬産もその性格を変化させた。

産業用需要消失後の重種馬生産を馬肉需要が下支えた。高度成長期、わが国の食生活は大きく変化した。その変化のひとつが畜肉消費量の増大であった。馬肉食そのものが一般化したわけではないが、ハム・ソーセージ類の消費が拡大し、馬肉はその消費量を伸ばした。本来、ハムは豚肉を原材料とするものだが、1948年伊藤傳三によって様々な畜肉を原材料として製造されるプレスハムが開発された⁽¹⁶⁾ ことが大きい。

また、軽種馬生産がある程度以上の放牧地・採草地を必要とし、相対的に高額の種類付け料を要したため、稲作転換から副業的に生産を開始した農家であっても、次第に専業化していった。これに対し、重種馬の生産はさして広い放牧地が必要なわけではなく、種類付け料も低廉であったことから、副業的生産が可能であった。

図2は1960年代から1970年代にかけてのばんえい



資料: 北海道市営競馬協議会・北海道市営競馬組合

図2. 開催日数と馬券発売額の推移

競馬の馬券発売額と開催日数の推移である。開催日1日あたりの発売額をみると、1960年は406万円だったのが、1970年には9.3倍の3,763万円になっている。開催日数の増大と1日あたり発売額の増大があいまって、ばんえい競馬の発売額は急増していく。とはいえ、大きな伸びをみせたのはばんえい競馬だけではない。1960年16.6兆円だった名目国民所得は1970年には75.2兆円と約4.5倍になっている。まさに高度経済成長下にあったこの時期、各公営競技の発売額は驚異的な伸びをみせている。1970年と60年を比較すると、中央競馬が14.0倍、競艇が14.5倍、オートレースが8.6倍、競輪が6.5倍、そしてばんえいを含む地方競馬は10.0倍となっている。大きく伸びたとはいえ、地方競馬全体からみると、特に大きな伸びだったわけではない⁽¹⁷⁾。

産業現場とばんえい競馬が密接に結びついていた時期にあっては、賞金もさることながら、優秀な競走成績をおさめたことが産業用馬としての価値を高めるという意味も大きかったという⁽¹⁸⁾。しかしながら、産業用馬としての需要がなくなる一方で、馬券発売額の増大で報償金(賞金・手当など)の水準が引き上げられ、報償金の獲得が馬を所有する主たるインセンティブとなっていく。1970年馬券発売額が24.8億円で報償費は1.3億円であった。6年後の1976年の馬券発売額は70年の7.8倍あたる193億円となり、報償費は馬券発売額の伸び率を上回る9.2倍の12億円となっている。この段階になると、競馬関係者は報償費で生活できるようになっていた。副業的競馬から専業的競馬への転換がなされたのである。

1970年代には競技の形態も少なからず変化をとげている。

ひとつめは、コース形態の変化である。草創期から長らくU字型のオープンコースで競技が行われていた。外を回る距離ロスを避けるため、スタート直後から各馬がインコースに殺到する。中西関松はこのコース取りに卓越した技能を発揮した。しかしながら、コーナーに各馬が殺到することから、かじ棒が交差して破損したりする事故が多発した。早くから直線セパレートコースでの実施が検討されてはいたが、櫓を迅速にスタート地点に戻す方法が見つからず実現しなかった。最終的には、直線セパレートコースに平行した線路を敷設し、トロツコで運搬する方法が採用され今日に至っている。1963年に旭川競馬場で直線走路が設置され、1968年には残る3場すべてが直線化された。

また、1960年代～70年代には帯広を除く3場の移転新築が行われ、帯広競馬場も1974年に施設の大改修が行われた。1971年には現在も使用されている電動ゲートが設置された。

発券業務の機械化も行われ、1977年には岩見沢、79年には北見、80年には旭川、そして81年には帯広で発券業務が機械化された。

馬券発売額の急増がこうした大規模な投資を可能とした。だが、一方、こうした多額の投資が競馬事業の重装備化をもたらし、固定的費用の比率を高め、経営上の負担を大きくしたことも指摘しておきたい。

競走で使用される用具も変化している。草創期には実際に産業現場で使用される木製櫓が用いられたが、耐久性の問題や水分の吸収による重量の変動などの問題があり、1971年には鉄製櫓が競走で用いられるようになった。また、かつては木製であったかじ棒も1971年からグラスファイバー製になった。重量物も1976年からは現在と同じ鉄板の重量物になった。競走が専業化プロ化する過程で、用具も産業現場のそれとは異なったものが用いられるようになったわけである。

5. ミスターばんえい 金山明彦

産業現場からの難脱により、ばんえい競馬は専業的でプロフェッショナルな競馬として大きく発展する。副業的競馬の時代のスターが中西関松であったとすると、専業的でプロフェッショナルなばんえい競馬が生み出した不世出のスターがミスターばんえい・金山明彦

彦である。

金山は1951年10月北海道滝川市の家畜商・金山三郎の長男として生まれた。「幼少の頃から大の馬好きであったが、それに拍車をかけたのが父親に連れられてばん馬を見に行き、中西関松さん（現在の調教師）を見て、その勇壮な騎乗姿にあこがれを抱いたことだった」⁽¹⁹⁾という。金山の記憶によると、小学校5年生か6年生の頃、父に初めて岩見沢競馬場に連れて行ってもらったとのこと⁽²⁰⁾であるから、1962～63年のことであろう。この頃はしっかりとした厩舎施設もなく、馬車に TENT をかけた厩舎だったという。

中学生の頃には、当時至る所で開催されていたばん馬大会（草ばん馬）用に馬を買ってもらい、土日に出場するようになっていた。その頃には騎手になる決意を固め、卒業後、父と親交のあった中西関松の伝手でばんえい競馬に身を投じた。

当時の中西はばんえい競馬では神様のような存在だった。ただ、これはトシエ夫人も言っていたことであるが、師匠中西関松はふだんは優しい温厚な人物であったが、勝負にかける執念はすさまじく、負けたら馬に当たることもあったという。この師匠の姿をみて、金山は馬や厩務員に当たり散らすことはないよう心がけていたという。

2年間の厩務員生活⁽²¹⁾の後、1969年6月14日1回岩見沢初日で初騎乗・初勝利という華々しいデビューを飾る⁽²²⁾。当時は新人騎手の減量もなかったから、ベテラン騎手たちとハンデなしの勝負であっただけにその価値は大きい。騎乗馬は父三郎所有のヤマトオーザであった。競走成績書によると、ヤマトオーザは父第四エタロン（ペル）、母旭香（ペル系）で青毛のペル系

7歳⁽²³⁾牝馬である。年度始めの格付けは丁Aであったが、年度の終わりには丙級に昇格し、1973年10月に死亡するまで金山に勝ち星をもたらした。金山はこのヤマトオーザと後に農林大臣賞典（現在のばんえい記念）を制覇したカツタローの2頭を思い出の馬としてあげている⁽²⁴⁾。

当時の格付けは甲・乙・丙・丁A・丁Bおよび3歳であった。3歳馬を除き、格付けは取得賞金ではなく馬体重によるものである。900 kg 以上が最上級の甲級である。表2は1969年度の古馬（4歳以上）の最終格付け別・年齢別の競走馬数を示したものである。1969年度登録された古馬は出走馬・観出走馬をあわせ418頭である。甲級馬は全体の5%に相当する19頭しかない。つまり馬体重が900 kg を超える馬は全体の5%に過ぎないということである。現在のばんえい競走馬の古馬で馬体重が900 kg を下回る馬はまずいない。

また、性別の競走馬数をみたのが表3である。古馬では全体的にせん馬の比率が高いものの、丁A級や丁B級では牝馬の比率が比較的高くなっている。このクラスの馬は都市競馬よりも農家で飼養されている繁殖牝馬が多く含まれていたことによるものと思われる。多くの農家では繁殖・農耕兼用で主として牝馬を飼養していた。現在では、平地競馬ではもちろんのこと、ばんえい競馬でもあり得ないことだが、当時は繁殖牝馬でも競馬に出走していた⁽²⁵⁾。

金山がデビューした1969年にばんえい競馬に出走した騎手は112人もいる。このうち21人が100回以上出走している。この21人の年齢分布を示したのが表4である。1911（明治44）年生まれの上田吉隆を筆頭に50代が3分の1を占めている。当時50歳の中西をはじめ、

表2. 年齢別・級別競走馬数

	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	計 (頭)	構成比 (%)
	(頭)											
甲	—	3	2	—	3	4	3	2	1	1	19	5.0
乙	3	10	6	7	3	9	3	1	1	—	43	10.0
丙	5	11	6	11	8	8	11	6	3	—	69	17.0
丁A	14	20	21	17	13	10	11	7	5	—	118	28.0
丁B	40	23	19	21	8	26	15	8	7	2	169	40.0
計	62	67	54	56	35	57	43	24	17	3	418	100.0
構成比 (%)	14.8	16.0	12.9	13.4	8.4	13.6	10.3	5.7	4.1	0.7	100.0	

注：3歳馬は96頭登録されている。

資料：北海道市営競馬協議会『昭和44年度 競走成績書』

表 3. 性別競走馬数

		牡馬	牝馬	せん馬	計
頭数 (数)	甲	4	1	14	19
	乙	17	6	20	43
	丙	25	10	34	69
	丁 A	26	38	54	118
	丁 B	39	62	68	169
	古馬計	111	117	190	418
	3 歳	71	20	5	96
比率 (%)	合計	182	137	195	514
	甲	21.1	5.3	73.7	100.0
	乙	39.5	14.0	46.5	100.0
	丙	36.2	14.5	49.3	100.0
	丁 A	22.0	32.2	45.8	100.0
	丁 B	23.1	36.7	40.2	100.0
	古馬計	26.6	28.0	45.5	100.0
	3 歳	74.0	20.8	5.2	100.0
	合計	35.4	26.7	37.9	100.0

資料：表 2 に同じ

彼らはいずれもばんえい競馬の草創期から活躍し続けてきた人々である。一方、20 代はわずか 3 人しかいない。金山は「親父みたいな人たちがばかりで、自分に近い年の人は山田（勇作）さんと木村（卓司）さんしかいなかった」と回顧する。実は 20 代は他にもう一人当時 27 歳の尾ヶ瀬富雄がいたのが、当時 17 歳の金山少年からみると、27 歳の尾ヶ瀬は近い世代には思えなかったのだろう。

岩見沢・旭川・北見・帯広の 4 場を転戦する騎手も多くなってはいたが、その一方で 1 か所だけに趣味的に出走する人もまだまだ多かった。表 5 は 1969 年の出走回数別の騎手数である。出走回数 20 回未満の騎手が約 4 割をしめ、7 割の騎手が 50 回に満たない。逆に 200 回を超える騎手は 6 人と全騎手の 5% に過ぎない。その中でも中西の 309 回は群を抜いて多い。

金山がデビューした 1969 年度の開催日数は 66 日に過ぎない。デビューしたての新人騎手には騎乗依頼もなかった。制度的に馬主と調教師・騎手の分離が行われたといっても、産業現場と不可分であった時代、ばんえい競馬では自分の馬に乗って出場するのが基本的なカタチであるから、自分の馬が少なければ騎乗数は少ない。金山の馬もデビュー時には父三郎の所有馬ヤマトオーザ 1 頭である。金山自身、ばんえい競馬だけで飯が食えるとは思っていなかったという。

表 4. 1969 年 100 回以上騎乗した騎手の年齢分布

生年	人数 (人)	構成比 (%)	備考
50～59 歳	7	33.3	最高齢 58 歳 最年少 21 歳
40～49 歳	5	23.8	
30～39 歳	6	28.6	
20～29 歳	3	14.3	
計	21	100.0	平均 42.7 歳

資料：北海道市営競馬協議会資料

表 5. 出走回数別騎手数

騎乗回数	人数 (人)	構成比 (%)	備考
1～19 回	48	42.9	尾ヶ瀬富雄 207 回、早瀬巖 220 回、 藤川晴雄 245 回 山本幸一（上富良野）274 回、 松原仁三郎 297 回 中西関松 309 回
20～49 回	19	17.0	
50～99 回	24	21.4	
100～149 回	7	6.3	
150～199 回	8	7.1	
200～249 回	3	2.7	
250～299 回	2	1.8	
300～349 回	1	0.9	
合計	112	100.0	

資料：表 3 に同じ

金山はばんえい競馬が産業現場と不可分であった時代を知る最後の世代かもしれない。金山が体験した馬の産業現場は冬山造材と客土事業であった。山仕事は、中西厩舎にいた人に冬場暇ならということで、一冬だけ連れて行ってもらったことがあるだけだが、客土事業には 5～6 年行ったという。客土作業では、当初は手作業で馬糞に土を積み込んで運搬していたが、手積みからドラグレーンを利用した積み込みが行われるようになり、さらに 1960 年代後半になると、馬だけでなくトラクターによる糞の運搬も行われるようになっていたという⁽²⁶⁾。金山が従事した客土作業はまさにこの時代のことである。

夏はばんえい競馬に出走し、冬は「若い衆」を連れて冬山造材に従事するというのが、当時の親方的存在の騎手（兼調教師）の一般的スタイルだった。「山稼ぎの方が儲かったかもしれない。鞍馬は趣味みたいなものだった」と金山は当時を回顧する。

1970 年度から格付け区分の呼称が甲・乙・丙・丁 A・丁 B から A・B・C・D に変わる⁽²⁷⁾ が依然体重別区

分である。ボクシングなどの減量と同じで、下のクラスに編入されるほうが有利であるから、無理な減量も行われることとなる。「体重をふやさないようにするため、懸命の努力をすることが常識のようになっていた」⁽²⁸⁾ ため、1973 年からは、平地競走と同様、取得賞金別の級別編成が行われるようになった。

金山のデビュー当時は、まだまだ、「百姓ノ少シ氣ノ利イタ人が騎手ニナツテ競走スル」という色合いは濃厚であったものの、伸び続ける馬券発売額を背景に、ばんえい競馬は急速に変貌をとげつつあった。

金山がデビューした 1969 年のリーディング騎手は師の中西であった。まだ 10 代の少年だった金山にとって、

中西は神様のような存在だったという。障害をあげさせたら中西の右に出るものはいなかった。金山は中西の騎乗をじっと見続けていた。

しかしながら、時代は徐々に移り変わりつつあった。1970 年になると、神様・中西を押さえ戦後生まれの山田勇作が 52 勝をあげ、初のリーディング 1 位を獲得している（2 位は中西の 44 勝）。1971 年にはリーディングを奪還するものの、1972 年は若手の木村、山田に次ぐ 3 位となる。ちなみにこの年金山は 5 位となりトップジョッキーの仲間入りを果たしている。レースで中西に勝ったときはうれしかったが、その後自らの勝ち星が中西を上回るようになって、自分が中西を超え

表 6. 金山明彦騎乗成績

年度	開催日数 (日)	騎乗回数 (回)	1 着数 (回)	勝率 (%)	取得賞金 (円)	備 考
1969	66	89	10	11.2	821,000	6 月 14 日初騎乗初勝利
1970	66	83	19	22.9	1,847,000	
1971	72	174	25	14.4	6,086,000	
1972	84	167	30	18.0	5,740,000	
1973	96	382	76	19.9	22,338,000	カッタローで農林大臣賞典初制覇、リーディング 1 位
1974	102	558	120	21.5	54,989,500	
1975	102	496	102	20.6	63,002,500	通算取得賞金 1 億円達成
1976	102	526	109	20.7	70,837,000	
1977	102	571	100	17.5	76,794,500	
1978	102	549	100	18.2	77,904,000	通算 500 勝達成
1979	102	579	109	18.8	95,206,000	
1980	102	574	107	18.6	124,560,000	ダイケツで農林大臣賞典制覇
1981	108	605	65	10.7	84,984,000	
1982	120	700	116	16.6	112,929,500	通算 1,000 勝達成
1983	120	699	118	16.9	106,447,000	
1984	126	745	114	15.3	88,886,000	
1985	126	727	128	17.6	95,807,500	通算取得賞金 10 億円達成
1986	132	776	122	15.7	106,067,000	通算 1,500 勝達成、キンタローで農林水産大臣賞典制覇
1987	132	749	109	14.6	87,106,500	
1988	132	764	113	14.8	83,211,500	
1989	138	811	139	17.1	121,300,000	
1990	138	812	151	18.6	131,172,500	通算 2,000 勝達成
1991	138	814	120	14.7	134,189,500	ヒカルテンリュウで農林水産大臣賞典制覇
1992	138	810	113	14.0	125,459,000	
1993	144	852	153	18.0	148,428,000	通算取得賞金 20 億円達成、マルゼンバージで農林水産大臣賞典制覇
1994	144	852	157	18.4	139,567,000	通算 2,500 勝達成
1995	156	906	163	18.0	150,691,500	
1996	150	830	121	14.6	100,457,500	再度マルゼンバージで農林水産大臣賞典制覇
1997	150	879	167	19.0	114,687,500	通算 3,000 勝達成
1998	150	871	124	14.2	93,661,500	
1999	150	762	99	13.0	58,441,500	11 月 7 日最終騎乗
通算	3,690	19,712	3,299	16.7	2,683,620,000	

資料：北海道市営競馬組合

たと思ったことはないという。

1973年、金山は、父の持ち馬であるカツタローによる農林大臣賞典の初制覇などの大活躍をみせ、初のリーディング1位に輝く。この年中西は5位に終わる。中西の時代から金山の時代に完全に移り変わった。

表6は金山の全競走成績である。金山は破竹の快進撃を続け、1973年から1980年まで連続して1着数でトップに立ち続ける⁽²⁹⁾。いつしかマスコミからは「ミスターばんえい」という称号が奉られるようになっていた。ミスターばんえいとよばれるようになった時期について、金山自身は「たぶん通算1,000勝か1,500勝をあげた頃ではないか」というが、実際はもう少し早いのではないかとと思われる。

デビューした年にはわずか821,000円だった取得賞金額も、年を追うごとに増えていく。初のリーディング1位を獲得した1973年には2,000万円を超えた。1982年には1億2千万円の賞金を稼ぎ出した。馬券発売額の急増にともない、賞金も手当も年々増額されていった。金山に限らず、騎手や調教師・厩務員もばんえい競馬だけで生活できる時代になっていた。

先に掲げた図1をみても明らかなように、1970年代前半のばんえい競馬の伸び率は目を見張るものがある。1971年に33.7億円だった馬券発売額は、80年には269億円と、10年間に8倍になっている。同じ期間、他の公営競技も発売額を増やしてはいるが、中央競馬は2.9倍、地方競馬は2.5倍、競輪は2.0倍、オートレースは2.5倍、そして競艇は3.1倍であるから、ばんえい競

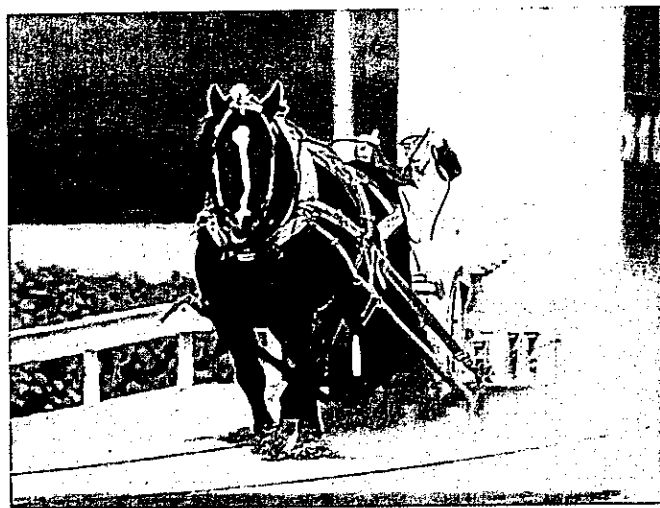


図3. 金山明彦 (写真提供：ばんえい十勝)

馬の伸びが際だって大きいことがわかる。1971年には66日だった開催日数は74年には102日となる。また、1日あたりの発売額は71年には約4,700万円だったのが、1974年には約1億4,300万円に伸びている。馬券発売額は、1日あたり発売額の増大と開催日数増加の相乗作用で大きく伸び、そして74年から80年までは102日間で開催日数は増えていないが、1日あたり発売額は年々伸び続け80年には2億6,400万円になっている⁽³⁰⁾。

1980年代に入ると、工藤正男や久田守といった強力なライバルも出現し、リーディングを奪われる年も出てくるが、それでも金山はトップに君臨し続ける⁽³¹⁾(図3)。しかし、45歳を迎えた頃から引退を意識するようになる。体力の限界を感じたわけではないが、調教師として第二のスタートを考えたからだという。

そして、1999年11月7日、通算3,299勝という輝かしい記録を打ち立て惜しまれつつ現役騎手を引退した。キリのいい3,300勝で終わるとというのが金山の腹づもりだったが、最後の日に勝てると踏んでいた馬で勝てなかったレースが1つあったという。ほほえみ続けた勝利の女神が最後に少しだけそっぽを向いたのだろうか。

ばんえい競馬の騎手は長い手綱の余った部分で鞭打する。ふつうは利き腕で鞭打するが、金山は右でも左でも鞭打できたという。このことからもうかがわれるように、優れた運動能力を有していたことに加え、幼少期から馬に親しんでいたせいであろうか、馬の言葉がわかるとさえいわれた。

加えて、金山の騎乗スタイルは革命的なものであった。『ホースニュース・馬』のばんえい担当記者として長く活躍してきた小寺雄司は、金山の騎乗スタイルを「当時のボクシングのヘビー級王者、カシアス・クレイ(モハメド・アリに改名する以前の名前)を形容するたびに使われた「蝶のように舞い、蜂のように刺す」の表現のごとく、まるで馬ソリの上でボクシングをしているようにあの巨大なばん馬の尻の陰から、右、左と上半身を見え隠れさせる騎乗法」⁽³²⁾と表現している。

中西など古い騎手たちは櫓の上でありあまり体を大きく動かすことはなかった。馬車追い、冬山造材、そして客土作業といった馬が活躍した産業の現場で、騎手が体を大きく動かすことは、長時間にわたる作業において体力の消耗を招くだけでなく危険ともなう。体全

体を使うのではなく、長手綱ひとつで馬を自在に操ることが産業現場では求められたと思われる。金山の編み出した騎乗法は後に続く騎手たちに受け継がれた。金山は騎乗法に革命をもたらしたのである。

金山のダイナミックな動作は、産業現場で生まれた動作ではなく、ばんえい競馬という馬事競技に適した騎乗法だったといえよう。金山以降、ばんえい競馬の世界に入って来た騎手たちは、もはや産業現場で馬を使役した経験をもたない世代である。彼らはすべてとっていいほど金山の影響を受けている。

先に述べたように、1991年をピークに発売額は減少に転じる。その後、ばんえい競馬は崩壊から再生へと苦難の途をたどることとなる。ミスターばんえい金山明彦の現役引退はばんえい競馬の黄昏を象徴しているかのようであった。

6. 今後の課題—むすびにかえて—

1970年代、馬券発売額の急増と産業現場からの馬の退場という二つの要因によって、ばんえい競馬は、副業的な競馬から専門的なプロ競技へと変質し、今日われわれが見るばんえい競馬をつくりあげた。

開催すれば多額の馬券が売れ、主催市の財政に多大な寄与を果たした。しかしながら、黄金期が続くことはなく、1980年に入ると馬券発売額は減少に転じた。この事態に対し、場外発売の強化や開催日数の増大といった対策がとられたものの、事態を逆転できるまでの効果はなかったのだが、1985年をボトムとして馬券の発売額は再び増加に転じる。バブル景気の恩恵であった。1990～91年には320億円という空前の発売額を記録し、80年代の危機的様相は払拭される。

しかしながら、すでに80年代に露呈しつつあった構造的な問題が解決されたわけではなく、一時的に隠蔽されたに過ぎなかった。バブル崩壊後の長期にわたる景気の低迷で、ほぼすべての公営競技の発売額は低落を続けた。ばんえい競馬も全く同様である。そして、1990年代終わり頃から、ついに各地の地方競馬でドミノ倒しの廃止がおこり、ばんえい競馬も存続の危機に陥る。

高度経済成長の終焉とともに、1980年代、公営競技の構造的問題はすでに明らかになっており、何らかの対応が求められていたのが、抜本的な対策がとられないままバブルの「神風」で問題は先送りされたように

思われる。

長期低落期の公営競技の抱える一般的な問題と、ばんえい競馬の特殊な事情については今後の課題としたい。

〔註〕

- (1) 久居利男 (1978)¹⁰⁾。
- (2) 今日の道営ホッカイドウ競馬の起源は進駐軍競馬にある。このことについては道新スポーツ (1989)⁹⁾などに詳しい。
- (3) このときの審議過程は古林英一 (2014)¹⁴⁾に簡単にまとめられている。
- (4) 第2回地方競馬法案委員会における大石倫治農林政務次官 (当時) の発言。
- (5) 同委員会における法案提出者小笠原八十美の発言。
- (6) 古林英一 (2014)¹⁴⁾。
- (7) 大槻正男 (1947)³⁾は、今後の日本農業の展開方向として、水田中心から有畜畑作農業への転換を提言している。
- (8) 推測の域を出ないが、後の競馬法制定にあたり、競馬の目的が明示されていないのは、このような競馬の出発が影響しているのではなかろうか。
- (9) 内田靖夫 (1978)²⁾, p.16。
- (10) この節については、2009年5月と2013年3月に行ったトシエ夫人に対するインタビューによるところが大きい。
- (11) 中西関松 (1983)¹⁰⁾。
- (12) 道新スポーツ (1989)⁹⁾, p.124～125。
- (13) 当時の格付け区分で丁Bというのはこうした馬のクラスだった (内田靖夫 (1978)²⁾など)。
- (14) 山田勇作 (現調教師, 1945年生まれ)。騎手でも調教師でも1,000勝以上をあげた。
- (15) 木村卓司。元騎手・元調教師。1948年生まれ。前年1968年にデビューした。この当時は父与惣治も騎手として現役であった。与惣治はタクシー会社を運営するかわらばんえい競馬の騎手・調教師として活躍した。
- (16) プレスハムの開発・普及については伊藤記念財団 (1991)¹⁾に詳しい。
- (17) 各競技の伸び率に格差があることは興味深い。高度経済成長期、わが国では経済力の地域間格差が拡大し都市集中が進行した。在宅投票がないこの時代、大都市を主たるマーケットとした中央競馬や競艇が大きく伸びたのではないかとと思われるが、このことについては今後の検討課題としたい。
- (18) これは全道各地で盛んに開催されていた草ばん馬でも同様で、優勝馬に与えられるメダルの有無は、馬の売買において大きな意味をもっていたという。

- (19) 金山明彦 (1983)⁴⁾.
- (20) 2009年8月に行ったインタビューによる。以下、特に出典を明記しない事項はこのときのインタビューによるところが多い。
- (21) ばんえい競馬では、現在でも、騎手になるには厩務員の経験が必須となっている。
- (22) 後に勝ち星を量産する金山であるが、デビュー戦は無我夢中だったという (金山明彦 (1983)⁴⁾).
- (23) 現在の表記では6歳だが、本稿では原則として旧表記法にしたがう。
- (24) 金山明彦 (1983)⁴⁾.
- (25) 現在では繁殖登録された馬はばんえい競馬に出走することはできないが、現在でもばん馬大会に種雄馬が出走することがある。
- (26) 馬を使った客土作業のについては齊藤俊彦 (2012)⁶⁾ に詳しい (p.26～28)。同書は北海道江別市周辺を描いているので、多少、地域差はあるかもしれないが、道内でそう大きな差はなかったであろう。また、同書は産業現場での馬使役・飼養の実態のみならず、その周辺産業についても丁寧に記述がなされており、参考になるところが大きい。
- (27) 出走頭数を確保するために、農耕馬をかき集めて編成されたのが最下級の丁B級であったが、この時期になると、出走馬が増加し、能力検定を行って競走馬を選別する時代になっていたことが、編成変更のひとつの理由だったようだ (内田靖夫 (1978)²⁾, p.42)。
- (28) 内田靖夫 (1978)²⁾, p.43.
- (29) 金山は1969年から99年までの31年間で、リーディング第1位で13回表彰されているが、勝ち鞍数でトップになりながら、騎乗停止処分のために、表彰されなかったことが5回ある。つまり、実質的には、31年間のうち、実に18回トップに立っている。1981年以降、勝ち星数でトップの座を他に譲ったのは、1981～83年 (いずれもトップは工藤正男)、1988～89年 (トップは久田守)、1998年 (トップは大河原和雄)、そしてラストイヤーとなった1999年 (トップは坂本東一) の7回だけである。ちなみに、この4人はいずれも金山より若い。
- (30) 年に1回発行されていた北海道市営競馬協議会の機関誌『ばんえい』をみると、1978年11月12日に北見競馬場で施行された農林大臣賞典競走では1億344万円が発売され、初めて1レースの発売額が1億円を超え、この日の入場人員は9,233名を数えたとか、その翌年である79年10月21日に旭川競馬場で施行された農林大臣賞典は前年を上回る1億2,611万円が売れ、当日1日で6億1,328万円の発売があったとか、さらにその翌年80年に岩見

沢で施行された農林大臣賞典では1億2,769,800円という売上げがあったといった記事が掲載されている。1980年当時人口約10万人弱だった北見市の競馬場に1万人近い人が詰めかけたのである。当時のばんえい競馬の人気のほどがうかがわれる。

- (31) 1985年のリーディング上位騎手をみると、金山が1位であるが、2位以下は、西弘美 (1959年生まれ、1980年初騎乗)、千葉均 (1955年1月22日生まれ、1979年初騎乗)、平田義弘 (1946年生まれ、1972年5月27日初騎乗)、藤本匠 (1962年生まれ、1983年初騎乗) の順となっている。平田以外はすべて金山よりも若い騎手である。年上の平田も初騎乗は金山よりも後である。

- (32) 小寺雄司 (2001)⁵⁾.

引用文献

- 1) 伊藤記念財団 (1991):『日本食肉文化史』財団法人伊藤記念財団。
- 2) 内田靖夫 (1978):『ばんえいまんがどくほん』, 北海道市営競馬組合。
- 3) 大槻正男 (1947):『日本農業の進路』朝日新聞社 (『大槻正男著作集 第五巻』楽遊書房, 1978年に再録)。
- 4) 金山明彦 (1983):「一千勝の思い出」北海道市営競馬協議会『ばんえい』No.13。
- 5) 小寺雄司 (2001):「輓曳名人列伝 3,299勝という金字塔を打ち立てた、ミスターばんえい～金山明彦～」地方競馬全国協会『Furlong』2001年9月号。
- 6) 齊藤俊彦 (2012):『馬のいた風景 ユベオツの風に吹かれて』中西出版。
- 7) 関耕平・平田直樹 (2008):「地方競馬の変遷一、益田競馬馬主・大石正の聞き書き」島根大学山陰研究センター『山陰研究』1号。
- 8) 地方競馬全国協会 (1972):『地方競馬史 第一巻』
- 9) 道新スポーツ (1989):「北の蹄音 ホッカイドウ競馬四十年史」, 道新スポーツ。
- 10) 中西関松 (1983):「産業功労賞受賞の喜び」北海道市営競馬協議会『ばんえい』No.13。
- 11) 久居利男 (1978):「ばん馬競走を実現させた当時の経過」旭川市競馬事務所編『市営旭川競馬 施行25周年記念誌』。
- 12) 古林英一 (2006):「輓馬大会から輓曳競馬へー1960年の資料を中心にー (1)」『Hippophile』No.26。
- 13) 古林英一 (2007):「輓馬大会から輓曳競馬へー1960年の資料を中心にー (2)」『Hippophile』No.27。
- 14) 古林英一 (2014):「ばんえい競馬の成立過程ー馬産振興から公営競技へー」『北海学園大学学園論集』162号。